

国府犀東『絵の国豊後佐伯町』に应う

富 沢

泰

(会員・蒲江町畑野浦)

国府犀東先生の紹介

『佐伯史談』の八月号の巻頭目次を開いて、目を通すと、絵の国―豊後佐伯町 国府犀東 とある、一気に読み通してみると、前後二回の佐伯探訪の記事である。然も執筆者の人物を知らせて頂きたいとある。清田先生、塩月編集長に念のために電話したが依然不明と言う。

筆者国府犀東先生とは一度だけであるが、東京のお宅を訪れてお教示を受け、尚私にとって極めて重要なことを願ったことで、終生忘れる事の出来ない人である。

先づ国府犀東その人を、私の知る範囲は狭いが知っているだけ紹介しよう。

種徳が実名で犀東は号である。文学博士の学位を持っておられるが、専門の学問の流れは知らない。若い頃は

文部官吏らしく青年会、処女会(現青年団)の組織指導、自治振興の講演等で地方行脚をやっている。また史蹟調査の旅は当時からやっていられるが、後に宮内庁出仕後も長年月に亘っている。

宮内庁での任務は大正天皇の侍講の一人として漢詩の補導をされたという。先生の友人の一人に黒板勝美博士があるが、黒板博士は東京帝国大学教授名誉教授を歴任、日本古文学学を確立、国宝保存会史蹟名勝天然記念物調査委員を兼ね、歴史関係の著述も多い。此の黒板博士の学問からみて、国府博士の学問系統もある程度想像出来るのではなからうか。

国府博士の著述は他に知らないが、唯一冊『神武天皇鳳蹟志』がはからずも私の手許に、東京の兄より送り届けられたのは、昭和十四年頃であり、それで先生のお名

前だけは知ったのである。

『絵の国豊後佐伯町』からみた佐伯の年表

博士の紀行文から佐伯の変遷を調べてみよう。二度佐伯を訪れたというが、この文は二度目の時である。文中（佐伯史談八月号）に養賢寺関係がある（四六頁）「一年火災に焼け今再建しつゝある」と、この火災は昭和二年（佐伯市史年表）による）で、昭和四年に着工、五年に竣工している。

すると再建途上は昭和四年頃となる。旅もその前後と推定される。なおこれは付け加えであるが養賢寺再建の棟領は武藤氏で佐伯出身である。名古屋で活躍中郷里の名刹建築のため帰省し竣工後、畑の浦福泉寺の再建を手がけている。両寺とも臨済宗妙心寺派に属する。

大正三年には大正天皇が連合艦隊演習統監のため佐伯湾に行幸なさっている。

博士は大正天皇行幸には幾度か供奉しておられるらしいが、紀行文の記述からして、供奉の旅でなく史蹟調査が本命ではなからうか。

佐伯の山野、海また町が詳しく書かれている。特に大

入島の神の井の描写は極めて写実性がある。その点からすると博士が特に関心の深かった神武東征の聖蹟調査に、公私は別として日向泊りまで船で渡ったに違いない。「鳳蹟志」の多くは足で書いたと自から述べている。

二十年前国木田独歩の足跡を慕って佐伯に来た（四三頁）という。昭和四年が再度の佐伯来訪なれば、第一回は明治も極く終わり頃のことであろう。紀行文の冒頭に玩具のように小さい汽船とは（四三頁）大阪から瀬戸内海を経て別府、大分から佐伯更に蒲江と南下し、土々呂細島の日向航路は大阪商船の汽船であつたらう。

私も蒲江から細島までこの船旅を少年の頃一度だけ味わった事がある、独歩も佐伯入りは汽船、去る日もまた汽船によつたという。大阪までの航路はまる二昼夜を要したと古老から聞いた。

「一本の鉄道でこんなにも町の様相を変えるものだろうか」博士と同行の一人が言う。その鉄道は大正五年十月だから、二度目の来訪までは十三年か四年の隔たりがある計算になる、当然町の発展があつて然るべきである。先生は『鳳蹟志』に「青年時代探古探訪足跡海内に遍し」と述べられ、更に中国、欧州行と旅を愛されたとい

う。絵の国、豊後佐伯町……とは、いみじくも名付けたるかなと感慨一入である。

国府博士との邂逅

昭和十五年の春、私は兄と同伴で東京渋谷駅近くの道玄坂の先生のお宅を訪れた。

私は神社昇格の資料を持って、神祇院に出張の要務を持っていった。兄は当時内務省の警視庁に職を奉じていたが、漢詩の研究と吟詠に取り組み、警察学校の生徒にその指導をしていた。

先生と兄との関係は、兄の上司に漢詩同好の士があり、その人を通じて知ったと聞いている。

その先生が神武天皇の研究家であり、且つ著書があることを知って、郷里にいる私に兄がその参考書として贈ってくれたものである。

私が国府邸を訪れた頃は、神武紀元二千六百年を機としての郷土の氏神伊勢本神社の昇格運動は既に始まり、私は旧上入津村役場に勤めており、若い情熱を燃やしていた最中であつた。

私の生地旧上入津村畑野浦には神武東征の伝説の伊勢

本神社が氏神としてある。神社縁起に依ると養老年間に創祀されたと伝えられている。

祭神は神かみやまと日本磐余彦尊いわれひこ（神武天皇）で、ご東征の砌みぎりの浦に船を寄せられたので、その時用いられた水入れの古土器をご神体としている。

その伊勢本神社の社格は村社で、これを県社までの昇格をと氏子こぞつての願望である。神武東征の縁のある神社は、日豊海岸では早吸はやすい神社があり、日本書紀にもある早吸門はやすいのもとの延喜式内神社である。

此の時代（戦前）神社の社格は厳然たるもので、上は官幣大社から下は無格社まであつた。

国府邸訪問の頃は既に神社資料調製事務は進められていた。

更に記念事業の一つとして大阪毎日新聞社の企画に依る。神武発祥の地日向の宮崎神宮より、東征の終局の地大和橿原神宮までの東征航行の海の大祭典行事である。

神たての盾を奉じての聖蹟巡行の船路は、古事記・日本書紀其他地方誌に依り、西日本に於ける二千六百年記念行事としては、最大の事業となる可能性を持つものである。

単に一新聞社の事業でなく、文部省・内務省・海軍省

も協賛、巡路関係府県は八府県に及び、この国家的祭典は、この当時の時代的背景が大きく作用したものであった。

神盾を奉ずる船は日向地方の西都原古墳出土の埴輪はにわを原型とした木造船で、航行は船ふね二十四丁、帆走も準備されている。船名は「おきよ丸」日向美々津は東征舟出の地、ここに伝わる行事にのつとつた命名である。

聖蹟地入港の際は搭乘した漕手数十人の海の若者が交替で櫓をこぎ、途中は大きな貨物船で曳行し、前後に供奉する関係府県の船団、海軍の駆逐艦等の大船団の東征の現代版で、美々津を出航して大阪安治川着港まで、昼夜四日間を要する日程である。

この「おきよ丸船団」の寄港地はとりも直さず神武史跡の国家的認定に等しいものである。よしんば従来の伝説地でも此の行事参加は、社の社格昇進にも見逃せない機会となる。畑の浦の伊勢本神社の氏子にとっては千載一遇の好機である。然し寄航地の認定は新聞社あるいは府県ではなく、文部省がその決定権をもっているだけに、過去の歴史性が基本で、亦地域性も考慮されると云う。

残念ながら日本の歴史古典に伊勢本神社は記載された

文献がない。郷土史家佐藤鶴谷先生の調査を根拠にした大分県関係の文書はあるが、神武天皇の東征行程を背景とする国家的資料がない。古代社会の航路上地域性からしてそれは当然であろうが、悩みの中心は此の資料不足の点である。毎日新聞の支局に、県当局にと働きかけたがなかなか決論は出ない。

古い俗諺に「捨つる神あれば救う神あり」と、その救う神が国府博士の「神武天皇鳳蹟志」の出現である。畑の浦に足を運んだことはない。従って記事も短い文にか過ぎない。然し「御東遷御行程概観図」の中に主たる寄港地の箇所が拾五点、その中には入っていることであった。日豊海岸の古代の航行路上重要な要素があったであろう。

国府邸での訪問はかなりの時間に及んだ。神武天皇についてのご教示は受けたが、こちらからの懇請についての諾否の御返答はなかったが別に失望感はなかった。それ程くつろいで私達を包んで下さった巾広い話題が続いたからである。

今でも印象に残っているのは西郷南洲の人間像、その詩その書等についての含蓄の深さは若い私では計り知れ

ぬものがあつた。また先生は愛刀家と聞いていた。そして蔵刀の幾振りか拝見さして頂いた。私はその頃、刀剣鑑定道の宗家本阿弥光遜先生の流れを汲む門弟に入門、研究に熱中していたので、刀については私が話題の中心だった事はいささか我が意を得た思いだった。

先生に記念に刀掛けにと畑の浦の山奥でとれた鹿の角を贈ったが、此の上もなく喜んで頂いた。

それからあまり長い時をかけず、文部省史蹟調査官黒板昌点氏が県庁の係官と同行、神社や地域調査に派遣されて来た。その調査官は先生の友人の前記黒板勝美博士の御子息であつたことも偶然とは思われぬものと感じた。

郷社昇格は各般の条件整備に日時を要したが目的を達成した。然し郷社昇格は、敗戦と云う日本の神社神道の大変換でその希望は消滅した。

御東征の「おきよ丸」舟航行事の寄港地に指定されたのはいうまでもなかった。畑の浦の狭い海岸にこの世紀の海の大祭典をと参集した人々は二万人を越したと言われている。この地区から若者が多数おきよ丸の漕手として搭乘した。国府先生の古代史、特に神武天皇の史蹟に

関する力と言うか徳というか、私にとって若き日の思い出の中で今に到つても一つの光明として輝いている。

佐伯市の文化会館の大ステージの大緞帳だんけんの原画は、菅一郎画伯が神武神話の伝説地大入島の「神の井」を画いたもので、天皇を中心にした随行の風景だが、此の絵の基が何であるかを知らぬ人が多くなりつつある時代であるが、しかし絵心が一切消え去るべきものではない。

今私達は自分のふるさとづくり、自然と心との両面から郷党の人々と思いを一つにして、遠く永い美化運動を実践しているが、その種は今にして思えば四十幾年前にすでに蒔かれたものであり、また決して枯れるものではない。

すでに早く物故されたであろう国府犀東博士と、いつの日か巡り合い語り会う日も近い年頃に私もなつたものだ。

(おわり)